

としては初めてのことで、さいわい、ハード、ソフトともに順調に開発が進んでいる。

DP がマイコンで構成されるとなると、天文屋の方ではマイコンなしでは考えもつかなかったような複雑な観測制御機能を果たさせようと夢想する。そしてひとつの希望が実現するとさらなる要求を出したくなるのが人情というもので、われながら実際にソフトやハードを担当している方々には気の毒なことだと思う。さまざまな新しい要求が出てくる時など、ソフト担当者は「もう嫌だ」と言いたくなるのが一度や二度ではないだろうと思うが、ミッションの成果を最大にするために必要なことだと理解して頂いている。ありがたいことである。

SOLAR-A の成功をめざして

はじめに述べたように、SOLAR-A の打ち上げは 1991 年の夏に予定されている。この衛星のプロトモデルの概念設計が本格的に始まったのは 1986 年のことだから、私たちは今ちょうど中間点に立っている。プロトモデルの総合試験は昨年 7 月に実施され、小さな不具合はたくさん見つかったものの、大過なく終了した。秋には姿勢制御系の試験がとどこおりに終わった。この新春には構造モデルの試験、春には熱モデルの試験、フライトモデルの製作は 89 年度終わりまで、というように遅れることの許されないハードルが設定されているが、これらをひとつひとつ飛び越えてゴールをめざすことになる。

時期が切迫してきているのは、ただ衛星本体の製作だけではない。地上での衛星データの受信は宇宙科学研究所の鹿児島宇宙空間観測所 (KSC) で行われる予定となっているが、KSC のみでは 1 日 15 週の衛星周回軌道のうち 5 周だけでデータを受信できるとどまってしまう。もし NASA の深宇宙通信ネットワークのいくつかの局が受信局として使えるならば、ほとんどの軌道で受信が可能となり SOLAR-A の観測データ量が 2~3 倍になる。現在この方向で NASA との協議を継続中だ。

SOLAR-A のデータを用いた研究をどう組織するかもミッションの成否に大きく影響する。打ち上げ後一定期間が過ぎたデータは全て公開されることになるが、それまでは SOLAR-A グループが専らデータ解析を行うこととなる。一方、現在のフレア物理学では衛星観測と地上観測を総合することが成果を大きくする鍵であり、データ取得後なるべく早期に基礎的データを広くサーキュレートして積極的に研究を組織することが大事であろう。ミッション全体の成果を最大にすることを狙いつつ、同時に研究チームとしての SOLAR-A グループが充分に報いられることを考えなければならない。言うは易し行うは難しである。

私たちは、こうしたさまざまな問題を積極的な討論のなかで解決してゆくことで、SOLAR-A のミッションと

しての成功をめざす考えだ。バイタリティにあふれた若き研究者が私たちに合流することを強く期待したい。

本稿は、SOLAR-A マネージャーの小川原嘉明氏 (宇宙研)、幹事の渡辺鉄哉氏 (国立天文台、BCS 担当)、同じく常田佐久氏 (東大理、SXT 担当)、WBS 担当の吉森正人氏 (立教大理) の援助があってまとめることができた。記して謝意を表す。

雑 報

2 個の谷中彗星 = 1988r, 1989a の発見

栃木県茂木町の谷中哲雄氏は、1988 年 12 月 30 日 5 時 7 分 (=29 日 20 時 7 分 U.T.) に下記の位置に光度 9~9.5 等級の新彗星を発見し、国立天文台に連絡して来られた。発見は 15 cm 双眼鏡に 25 倍を使用し、40 cm 反射鏡で移動を確認されていたので、直ちに国際天文学連合天文電報中央局へ通報した。折り返し天文電報中央局からは、アメリカのレベーターによる確認観測と共に谷中 (Yanaka) 彗星 = 1988r と命名されて、返電があった。

1989 年が明けて間もない 1 月 2 日 2 時 50 分 (=1 月 1 日 17 時 50 分 U.T.) に、同じ谷中哲雄氏は下記の位置に光度 11 等の別の彗星を発見し、移動を確認した後に国立天文台へ連絡して来られた。1988r が発見された直後であったので大変驚いたが、直ちに国内での確認体勢をとると同時に、天文電報中央局へ、別の谷中彗星として通報した。国内では、木曾観測所と仙台の小石川正弘氏により写真による確認観測ができた。天文電報中央局からの返電によると谷中彗星 1989a と命名され、小石川氏の他にアメリカのモーリスによる観測が併記してあった。

谷中哲雄氏は、栃木県真岡郵便局に勤務のかたわら、約 20 年の彗星捜索の経歴を持ち、Machholz 彗星 = 1988j の日本での独立発見者の 1 人でもある。又、1970 年に出現した Daido-Fujikawa 彗星 1970a = 1970I の隠れた独立発見者でもあった。

連続した 2 個の彗星の発見では、1975j と 1975k の彗星が約 1 時間 10 分の時間差で、岐阜県の森敬明氏により発見された記録がある。今回の谷中氏の 2 彗星は約 70 時間の時間差で発見されている。そして、1988 年の締め括りとなった 1988r と、1989 年の幕明けの 1989a が同じ発見者によるという大変に珍しい記録となったのである。尚、日本人による新彗星発見は、これで 53 個となった。2 彗星の発見位置は下記の通りである。

○Yanaka 彗星 1988r

U.T.	α (1950.0) δ	m_1	観測者
1988 Dec. 29.836	16 ^h 35 ^m 5 + 1°08'	9~9.5	谷中
	30.552 16 ^h 32 ^m 1 + 0°38'	9	Levy

○Yanaka 彗星 1989a

U.T.	α (1950.0) δ	m_1	観測者
1989 Jan. 1.743	13 ^h 45 ^m 3 + 9°45'	11	谷中

(香西洋樹)